資料１

黒漆厨子　千体観音図貼付

＜概要＞

員　　数	1基
法　　量	高さ 80.4cm
	屋蓋部　幅 66.5cm　　奥行 51.3cm
	軸部　幅 56.3cm　　奥行 40.7cm
時　　代	鎌倉～南北朝時代（14 世紀）

本作品は、木造で、全体に黒漆を塗る、屋根の上面が平らな四注形[1]の厨子[2]である。同様の特色をもつ作品が春日大社・興福寺を始めとした奈良周辺の寺社に多く伝来することから「春日形厨子」と呼ばれる形式である。

本作品は、通常の春日形厨子の屋根と比べ、上方に向かって緩やかな膨らみ（むくり）をもつのが特色である。これは東大寺戒壇院千手堂の厨子にみる宝形造[3]の形式を引いたものと想定され、類例との比較検討により、鎌倉時代後期から末期を上限として、南北朝時代に入る 14 世紀前半頃までに製作されたと考定できる。

厨子の内面には、絹本著色[4]の千体観音図が貼り付けられる。図を描いた絹に肌裏紙[5]を当てて、小麦粉澱粉糊を用いて貼り込んだものである。三面を合計して 1056 体の観音立像を数えることができ、いわゆる千仏信仰[6]にもとづく千体観音図であったことが知られる。特徴から、厨子本体と同じ鎌倉時代後期から南北朝時代前半頃に描かれたと推定される。

本厨子は鎌倉時代後半以降の中世に盛行した春日形厨子の古作である上に、内面に絹本著色の千体観音図を貼り込んだ極めて希少な作例で、当該期の千体仏と観音の信仰の様相を知る上でも重要な意義をもつ。

四注形[1]　4方向に傾く屋根のこと。寄棟造。
厨子[2]　仏像や仏画、経典をおさめるための容器のこと。多くは木製で、正面に扉をつける。
宝形造[3]　屋根に頂点があり、頂点から四隅へ同じ角度で傾斜した四角錐の形の屋根のこと。
絹本著色[4]　日本画の分類で、絹の布地の上に（絹本）色彩が施された（著色）作品のこと。
肌裏紙[5]　絹などに描かれた日本画の裏から補強のために貼られた和紙のこと。
千仏信仰[6]　過去・現在・未来にそれぞれ一千体の仏が出現するという信仰。

全体図

内面

扉開放時

背面

左側面

右側面